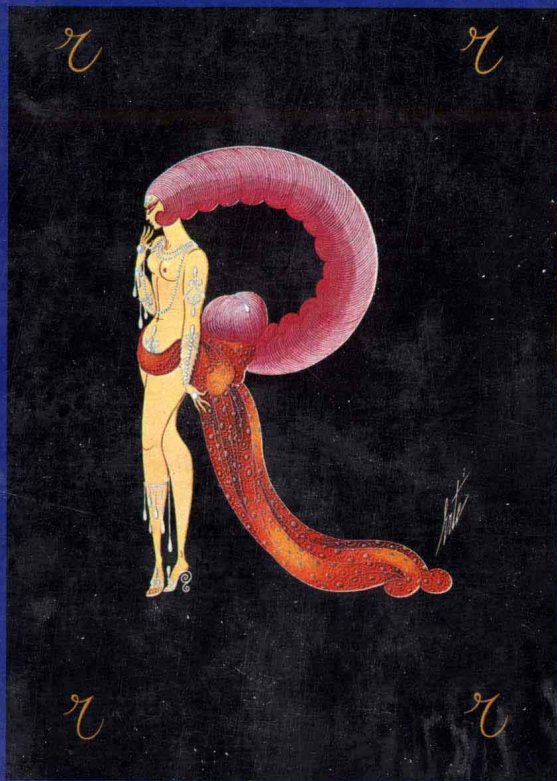


ロラン・バルト

世界の解説

篠田浩一郎著

Roland Barthes



岩波書店

ロラン・バルト

—世界の解説—

篠田浩一郎著

岩波書店

ロラン・バルト

一九八九年五月二五日 第一刷発行 ©

定価六二〇〇円

(本体六〇一九円)

著者 篠田浩一郎

発行者 緑川亨

発行所 〒100 東京都千代田区一ツ橋二五五
鐵岩書店

電話 〇三三六二四二二
振替 東京六二六三〇〇

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN 4-00-002573-2

凡 例

- 1 原文よりの引用は「」で示し、また引用した原文のなかの〈〉は「」に変えてある。
- 2 引用文中で傍点を打つたものうち、とくに傍点訳者ことわっていないものは、原文ではイタリック体である。
- 3 引用文中でへゝに入っている単語は、原文では頭文字が大文字で始まる場合である。
- 4 引用文は巻末に出典を示したが、原文が著書目録記載の原典にあるものは省略記号を用い、その他の場合は出典を個々に表示した。

なお、本書の執筆に当っては文体の統一、その他の理由で、私が引用原文のすべてを訳出したが、多くの既訳を参照させていただいた。記して、感謝のことばに代える。

目次

凡例

序章 光を求めて……………一

第一部 脱神話化

——“参加”の時代——

第一章 〈文学〉の脱神話化……………八

——エクリチュール文章体の発見——

第二章 歴史・死・女性……………三

——ミシュレをめぐって——

第三章 現代の神話はいかに読めるか……………七

——『神話作用』をめぐって——

第四章 演劇批評の時代…………… 壹

——古代劇からプレヒトへ——

第五章 幽閉された人びと…………… 八

——Homo Racianus——

第六章 新しい小説を求めて…………… 六

——強制収容所の文学から「ヌーヴォー・ロマン」へ——

第二部 記号学の開拓

——「構造主義」の時代——

第一章 衣服の記号学へ…………… 二八

——『モードの体系』へのプレリユード——

第二章 モードの構造…………… 三三

——記号表現・記号内容・レトリック——

第三章 マス文明と記号作用の諸相…………… 一五

第四章 記号学の理論と映像の修辞学…………… 一八五

第五章 バルト・ピカール論争 三二

——文学の科学へ——

第六章 物語の構造 三三

第三部 テクストとしての世界

——ポスト構造主義へ——

第一章 〈日本〉の発見と読解 三六

——記号表現の支配——

第二章 古典小説の現代的読み変え 三六

——バルザック再創造——

第三章 古典・前衛小説・五月革命・テクスト理論 三七

第四章 修辞学的分析と旧修辞学の復元 三〇一

第五章 生きられるテクスト 三三〇

——三つのユートピア——

第六章 記号破壊とエイゼンシュテイン……………三二

第四部 ロマネスクを索ねて

——「ポスト・モダン」へ——

第一章 テクストの快楽と享楽……………三五

——作家の覚醒——

第二章 現代において「わたし」とは何か……………三七

——バルト、バルトを語る——

第三章 恋愛のシステム……………三六

——情熱の復権——

第四章 絵画を読む……………四〇

——ネオ・ユマニスト、バルト——

第五章 音楽を書く……………四八

——ネオ・ロマンチスト、バルト——

第六章	見出された光	四四五
	——写真と母の映像——	
終章	光のゆくえ	四六一
註	四六九
図版一覧	四九七
後記	四九九
文献目録		
著者目録		
人名索引		

序章 光を求めて

二十世紀の後半、ほぼ三十年に近い多彩な文筆活動によって、フランス本国に限らず世界的な規模で絶えず衝撃的なメッセージを送りつづけたロラン・バルト（一九一五—一九八〇）。その生涯の特色は、青春時代のほぼ全期間を肺結核の療養生活のうちに過した点にある。

十九歳、哲学の大学入学資格試験に合格後にはじめて咯血、フランス、ピレネー地方の町で療養生活に入ってから、三十歳、スイス、レイザンの療養所でこの生活を打ち切るまで、実に十二年間、暫定的治癒とパリでの学業への復帰、教職、結核再発、ふたたびの治療用の学生サナトリウムへの入院、この繰り返しであった。およそ人間が自己に目覚めて、自己の未来に夢を抱き始め、その実現に乗りだすこの時期を、結核という姿のない、きわめて緩慢な、しかしその先には死の影をちらつかせるこの病魔とこれほど長く付き合って暮らしたことが、この青年に決定的と言ってもいい影響をあたえたと思像しても、あながち見当ちがいはあるまい。

ベッドでの安息と山の澄んだ大気と管理された食事と、これらが抗生物質もない時代のほとんど唯一の結核治療法でありながら、六十歳に達したかつての青年がその一種の自伝のなかに挿入したこの時代の体温表が語るように、朝ごとの体温の上下に自己の運命を読みとらざるをえない歳月を送り迎えたのである。その歳月の流れのうちに、この青年は何を見出したであろうか。言うまでもなく青春の特権はまず精神的なものへの覚醒であり、指向であり、渴望だが、ただ青年期を健康あふれる日々の中に過ごす場合とは異なり、長い療養生活を送った

若者は否応なしに自分が、ひいては人間が身体的存在であることを自覚せざるをえないであろう。その目覚めは、健康な青年がむしろ歡喜のうちに身体を発見するのは逆に、むしろ痛苦を伴ったものである。精神への渴望と身体への不安とは、どこかで調和点を見出さねばならない。

一九三八年夏、二十三歳のこの青年は、ギリシアを旅行し、六年後に学生サナトリウムの同人誌に「ギリシアにて」と題する短い紀行文を発表した。旅行は結核が癒えて学業に復帰していた期間に行なわれ、紀行文が発表されたのは二度目のサナトリウム生活の二年目のことであった。したがって、この短文は回想によって書かれたと推定できるが、旅行から執筆まで一定の時間を置いたことによつて、もつとも印象深かつたものがおのずから浮かびあがつてくるのはおよそ回想なるものの本質である。その主調音は何であろうか。

サラミス島の印象。「わたしたちは、太陽で黒焦げになつた泥に埋まる道路を歩いて島の端に達した。(中略) 大気は燃えあがり、海はきらめく。」⁽¹⁾ エギナ島では、「一面の陽の光が大理石を、^{つた}蔦の繁みを、草々を、木々のねじれた腕を包みこんでいる。(中略) 周囲のいたるところで、大気は太陽を浴びて爆発し、他方で、褐色の大地の上には酸味を帯びるまでに冷ややかな露が輝いていた」⁽²⁾。

最後の断章「デロス」では、エーゲ海の太陽の光輝とそのもたらす冷やかさとのこの対照は極点にまで到達する。「この島は陽光による燃焼の中心だ。太陽は固執し、血液を濃化し、両の眼、両の耳から入りこみ、その響きが聞えるが、それは、耳をつんざく静けさなのである。(中略) この燃焼の奇跡、それは、この燃焼の冷やかさだ。それは、純粹状態の、ほとんど熱のない光なのである。確かにここで、ひとは何ものかにはじめて接するが、それがギリシアと考えられるものであり、それはおそらく「火」以外の何ものでもない」⁽³⁾。

白熱のあまり冷やかな純粹光、この光が長らく病床に呪縛されてきた、また呪縛されつづける青年の心身に滲透し、心身はギリシアの「火」のイニシエーションに焼かれたのである。それは死と再生の儀礼とも言える。

このとき以後、青年の燃えあがる精神はおそらく冷えた明晰なものになり、身体は「恋の傷のように乾いた、火の傷」⁽⁴⁾として自覚されることになる。彼が文学的エッセーをサナトリウムの同人誌『エグジスタンス』に書き始めるのはこのギリシア旅行ののちのことであり、そのときから、書くという行為は彼にとつて「耳をつんざく静けさ」のうちに留まりつづける営為となることであろう。これを形而上の次元にひきあげて言い直せば、透徹した知性と感性とによつて、世界というこのつねに病める身体の立てる響きに耳を傾け、その病いのよつて来たる所以を白日のもとに曝すことである。世界は解読さるべき対象となつた。――

ロラン・バルトは一九一五年(大正四年)、ノルマンディー地方に突出するコタンタン半島の先端、シェルブールの港町に生まれた。第一次世界大戦勃発の翌年に当り、海軍士官であつた父が、艦隊の寄港地であつたこの町を居住地として選んだためであろう。ところがバルト生誕の翌年、十月にはその父はパッド・カレの海上の戦闘で戦死、彼は父親なるものを知らぬ子供として育てられることになつた。母親アンリエットは乳飲み児をかかえて、フランス南西部、大西洋とスペイン国境に近いバイヨヌの、夫の故郷の町に移住していた。父方の祖母と叔母の庇護のもとに暮すためであつたらう。

母親はプロテスタントであり、息子はプロテスタンティズムの宗教教育を受けることになつた。フランスは、圧倒的多数が、すくなくともカトリック教徒として洗礼を受けている人びとの国である。〈父〉なしの子供として、またプロテスタントとして、彼はその生涯の発端から社会の一種の異端者として、マージナルな存在として生きるよう運命づけられたことになる。彼の最後の著書によると、母親はかつて一度も息子を叱つたことがないというから、父親の不在によつて西洋社会の家庭に根をおろしたエディプス・コンプレックスを免れると同時に、おそらく生涯にわたつて、女性としては〈母〉しか愛することができない男性になるであろう。

一九二四年、九歳のおり母子はパリに上京、母親の労働によつて生計を立てる「物質的困難に満ちた」⁽⁵⁾時期を

迎えるが、毎年、学業が停止する夏休みはバイヨンヌの祖母の家で過した。晩年、「南西部の光」と題する一文（二九七七）でバルトは、「太陽が輝いていないときにさえも）けっして灰色でなく、けっして低くならない、南部の大きいなる光」について語り、これを「ただただ光り輝く光」と定義している。⁽⁶⁾ギリシアで発見された純粹光が、数十年の時間を超えて彼の内部に持続した、そのことの無意識的な証言であろう。

少年時代からバルトは観劇を好んでシヨルジュ・ピトエフ、シャルル・デュランの芝居に通つたが、一九三五年、二十歳のおり、結核が最初に治癒したおりにソルボンヌ大学の学友と古代演劇グループを結成、翌年には古代ギリシア悲劇の作家アイスキュロスの『ペルシアの人びと』を上演、みずからダレイオス王の役を演じた。しかしこの試みは失敗であり、みずから演じる人の才能が自分には欠けているという自覚をバルトにもたらし、やがて文学的出発に當つて、創作家ではなくまず批評家への道を歩ませることになつたと考えられる。⁽⁷⁾

バルトが古代演劇グループとともにギリシアの土を踏んだのはその二年後のことであり、そのさらに二年後、一九四〇年、古代ギリシア研究の碩学、ポール・マゾン教授の指導のもとにギリシア悲劇に現れる呪術と降神術に関する論文を作成、高等教育修了証書を授けられた。古代演劇への情熱とデロス島での「火」の秘儀の洗礼とが結晶したものであろう。

執拗にぶり返す病いのため、学業は中断を重ね、大学教授資格試験も断念せざるをえなくなり、学歴としては一九四三年に得た「文法と博言学」の学士号にとどまつたが、長いサナトリウムでの生活は別の収穫をもたらした。それは膨大な読書である。療養生活以前、すでに彼は、アナトール・フランス、ブルースト、ジード、ヴァレリー、さらに一九二〇年から三〇年代にかけての小説を読んでいたが、サナトリウムではギリシア、ローマの古典、フランス十七、八世紀のいわゆる古典主義文学、途方もない量の著作を残した十九世紀の小説家バルザック、フローベール、歴史家ミシュレなどを読破している。現代作家・哲学者としてのサルトルの著書も、当時刊

行されていたすべてを読んでいた。

ギリシア劇中の呪術や降神術の研究のために、〈集団表象〉の研究で知られる社会学者デュルケーム、人類学者マルセル・モースの著書に親しんだことが、のちのバルトの著作から遡行して推定できる。またサナトリウム滞在中、精神医学に関心をもち、そのための基礎課程を学んだこともつけ加えておこう。この経験はいずれ、精神分析学への高度な指向となって顕在化するからである。こうしたさまざまの人間科学へのこの時期における接近は、いずれ文学なら文学という現象を人間科学から得た知識によつて包囲し、分析するという独得の方法を生む、その礎石となるであろう。

バルトの名が広く世に知られたのは一九五三年、『零度のエクリチュール』の刊行の年、三十八歳という年齢に達したときであった。療養生活のため彼のデビューはこうして遅れたが、準備期間が長かっただけに、蓄積された思索と知識とはいわば腐食土となつて、ひとたび地表に芽をだしたロラン・バルトというこの一本の木に絶え間なく豊かな樹液を送りつづけることになるであろう。

本書は、この樹木が生長し、まことに多岐にわたる分枝を生え繁らせていくその過程、バルトの思考の変遷を、原則としてクロノロジックに描きだしたものである。なぜクロノロジックであるかと言えば、バルトの思考は時を追つて変化発展し、ほとんど片時も留まることがないからである。しかしその変化発展の過程にも、くつきりと前後を分かつ四回の一種の断絶があり、そのたびに彼は知的な意味で死を迎え、そこからあらたに再生したのであった。本書が四部から成る構成になつたのは、そうした理由による。

本書の副題を「世界の解読」としたのは先に述べた理由によるが、その意味内容は二重である。世界を知解可能な明晰なものにしようとするバルト自身の探究と、それをつうじて彼が描きだす知的軌跡の世界を解読しようとする私の探究と。私はこの過程でバルト自身の探究に一本の論理の筋を見出そうと努め、その結果、彼に四回

の断絶と再生とがあることを見出したのであった。しかし、すくなくとも四回の知的な死と再生にもかかわらず、生涯をつうじて根底において変らなかつたものがあるとするれば、それはギリシアの自然が啓示したあの純粹光であり、彼の生涯には絶えず光りきらめくものへの指向がある。そしてその最後の著作において、彼は生涯追いつめてきたその光、しかしいまや彼自身のものとなつた光を見出したと私は考える。本書は、ロラン・バルトという今世紀後半に活躍したひとりの知識人・作家がその到達点にまで到る思索の道筋を描いた、いわば一篇の物語イストワールの歴史である。

第一部 脱神話化

—— “参加” の時代 ——

第一章 〈文学〉の脱神話化

——エクリチュール文章体の発見——

1

ロラン・バルトは、『零度のエクリチュール』(一九五三)によつて、文学理論家ないし評論家としてデビューした。

しかしこの最初の著書は、一挙に書きおろされたものではない。一九四七年から五一年にかけて『コンバ』紙に発表したものを書き直し、あらたな章を書き加え、全体的に構成し直したものである。しかも、一九七一年の『デル・ケル』誌の、バルトの生い立ち、形成、文学的出発をめぐる質問への「回答」によるなら、本書を生み出す発想の起源はさらに古く、学生サナトリウムの雑誌『エグジスタンス』に一九四四年に書いた評論「異邦人」の文体についての考察」にまで遡る⁽¹⁾。

『異邦人』は一九四二年、ドイツ軍の占領下に発表された小説であり、作者のアルベール・カミュに突然名声をもたらした作品であつた。その内容は、要するに、アルジェリアに住むひとりのフランス青年が母の死に遭つても何ひとつ感情の動揺を見せず、また海岸で出会うアラブ人を何の動機もなくピストルで射ち殺し、その裁判の席でも何の抗弁もせず、まるで他人事のように処刑台に登るといふもの。しかし世界のすべてに對して無関心な異邦人のように振舞うこの主人公の運命は、ナチス・ドイツ軍の支配下にあつて沈黙と屈従を強いられていた